

中瀬 有紀



Oliver Tobin and Mariya Dashkina-Maddox in *Embattled Garden*, photo Costas. The place the photo taken is Frederick P. Rose Hall, the home of Jazz at Lincoln Center, during the Martha Graham Dance Company New York Season in March, 2011.

3月にリンカーンセンターRose Theaterで上演されたマーサ・グラハム・ダンスカンパニー・ニューヨーク公演において、全4プログラムのうちのひとつ『The Noguchi & Graham Connection (イサム・ノグチとマーサ・グラハムの関係)』は、カーネギーホールJapan/ NYC Festivalの一環で、日本文化と芸術の探求を目的としていました。マーサ・グラハム(1894~1991)はアメリカを代表するモダンダンスの先駆者、イサム・ノグチ(1904~1988)は日系アメリカ人の芸術家で、グラハムカンパニーの舞台セットをデザインしていました。1935年の『Frontier』から1988年の『Night Chant』まで、二人の共同制作は全25作にのぼります。これらの作品の日本らしさは、何に由来するのでしょうか。

イサムの作る舞台空間の日本らしさに、私は早い段階で納得しました。その証拠に、映像資料『The Sculpture of Spaces』の中で、彼は日本庭園から多くを学び、自身の舞台セットは究極にミニマムで能舞台のようだ、と話しています。しかし、マーサは著書『Blood Memory』の中で「私は

ネガティブ・スペース

アメリカと古代ギリシャ神話の女性に興味がある」と断言しているだけに、彼女の振り付けの日本らしさが何に由来するのか、どうしても答えが見つかりません。それでもリサーチを続けるうち、日本人振付師、伊藤道郎(1893~1961)の存在が浮き上がってきました。

伊藤道郎はマーサ・グラハムとイサム・ノグチの両者とそれぞれに接点があります。Dore Ashtonの著書『Noguchi East and West』によると、マーサは1923年に伊藤のバレエ『The Garden of Kama』で踊り、イサムは1926年に伊藤の舞台『At the Hawk's Well』の面をデザインします。伊藤との共同制作は、マーサの東洋への興味をかき立て、イサムの能への理解を深めます。これで、マーサの振り付けに見られる日本の能に通じる“間”の取り方、ネガティブ・スペースの構築に伊藤が貢献していたという仮説を立てることができました。

マーサ・グラハム、イサム・ノグチ、そして伊藤道郎という20世紀を代表する3人の芸術家がシンクロした地がニューヨークであり、彼ら3人の共通点は日本の能でした。